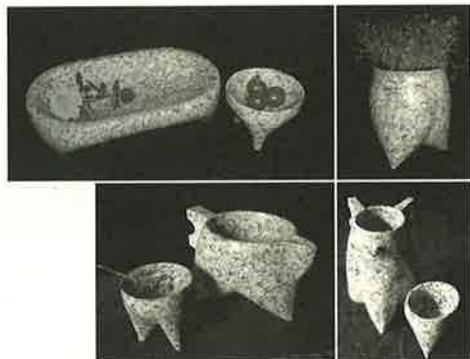


事務局所在地：岡山市伊島町2-5-26-301 代表者氏名：よしもと 正人
 電話番号：086-255-7868 FAX番号：086-255-7868 E-mail: art@aokoubou.com

文化活動の目的

岡山県産の万成石は桜色のカリ長石を含む美しい花崗岩として、古くから様々な石造物や建築物に活用されてきた。特に関東では名高い。明治神宮絵画館・新宿伊勢丹ビル・銀座千疋屋などの外壁に使われ、近隣では岡山県立美術館の内装材として美しい石姿を披露している。吉田茂氏や石原裕次郎氏のほか有名人の墓石にも多く用いられ、また彫刻家朝倉文夫氏はブロンズ像との相性の良さから全ての彫刻作品の台座に万成石を選び、彼の門下もそれに習っている。イサム・ノグチが牟礼町にアトリエを構える前の10年間を万成山で制作していたことは有名な話だが、彼の代表作のひとつ「パリ・ユネスコ庭園」は万成石ならではの造形を見せている。古くは城の普請に護岸工事、家の礎石から壁の石積み、石臼や灯籠に活用され、池田家代々の墓はもちろん万成石である。そんな地元特産の石も安価な外国産石材の大量輸入により、資材としての存在価値が低下してきている。石はその加工技術を含め、古来より日本人の生活文化を支えてきたものの一つであるが、様々な科学素材の発明や生活様式の変化から、現代人の生活を離れて行く現状にある。しかし耐久性など他の素材には及びもつかない特質があり、リサイクル可能な自然素材として見つめ直されて活用されるべき潜在力を秘めている。既存の有様を越えた、時代に即した生活資材として万成石を見つめ直し、文化素材としての「石」の価値を再発見しようという試みである。



万成石製品の一例

文化活動の経過

1993年以来、様々な屋外造形物に万成石を活用してきたが、近年の国産石の衰退を近く見るにつけ、もっと生活に密着した方向での活用法がないかと模索を始めた。2004年9月に開いた「生活の中の石」展を契機に石を使った生活用品の研究開発に着手した。食器や照明器具、キッチンや水回り製品、傘立てや衣類掛けなど新しい発想で生活にとけ込む石の可能性を提示した。また、近隣在住の小学校児童や保護者を招き、石切場見学や石割りの実演などを行い、万成石の周知に努めた。2005年からは工

彫刻家 よしもと正人(岡山)

万成石の魅力引き出す展

平成16年9月13日 山陽新聞より

世界地図の隅に秋の山、丸い山、赤い山、茶色の山、緑の山、黒い山、色々な山がある。その中でも、岡山県産の万成石は、桜色のカリ長石を含む美しい花崗岩として、古くから様々な石造物や建築物に活用されてきた。特に関東では名高い。明治神宮絵画館・新宿伊勢丹ビル・銀座千疋屋などの外壁に使われ、近隣では岡山県立美術館の内装材として美しい石姿を披露している。吉田茂氏や石原裕次郎氏のほか有名人の墓石にも多く用いられ、また彫刻家朝倉文夫氏はブロンズ像との相性の良さから全ての彫刻作品の台座に万成石を選び、彼の門下もそれに習っている。イサム・ノグチが牟礼町にアトリエを構える前の10年間を万成山で制作していたことは有名な話だが、彼の代表作のひとつ「パリ・ユネスコ庭園」は万成石ならではの造形を見せている。古くは城の普請に護岸工事、家の礎石から壁の石積み、石臼や灯籠に活用され、池田家代々の墓はもちろん万成石である。そんな地元特産の石も安価な外国産石材の大量輸入により、資材としての存在価値が低下してきている。石はその加工技術を含め、古来より日本人の生活文化を支えてきたものの一つであるが、様々な科学素材の発明や生活様式の変化から、現代人の生活を離れて行く現状にある。しかし耐久性など他の素材には及びもつかない特質があり、リサイクル可能な自然素材として見つめ直されて活用されるべき潜在力を秘めている。既存の有様を越えた、時代に即した生活資材として万成石を見つめ直し、文化素材としての「石」の価値を再発見しようという試みである。

「生活の中の石」展は、岡山県産の万成石をテーマにした。万成石は、桜色のカリ長石を含む美しい花崗岩として、古くから様々な石造物や建築物に活用されてきた。特に関東では名高い。明治神宮絵画館・新宿伊勢丹ビル・銀座千疋屋などの外壁に使われ、近隣では岡山県立美術館の内装材として美しい石姿を披露している。吉田茂氏や石原裕次郎氏のほか有名人の墓石にも多く用いられ、また彫刻家朝倉文夫氏はブロンズ像との相性の良さから全ての彫刻作品の台座に万成石を選び、彼の門下もそれに習っている。イサム・ノグチが牟礼町にアトリエを構える前の10年間を万成山で制作していたことは有名な話だが、彼の代表作のひとつ「パリ・ユネスコ庭園」は万成石ならではの造形を見せている。古くは城の普請に護岸工事、家の礎石から壁の石積み、石臼や灯籠に活用され、池田家代々の墓はもちろん万成石である。そんな地元特産の石も安価な外国産石材の大量輸入により、資材としての存在価値が低下してきている。石はその加工技術を含め、古来より日本人の生活文化を支えてきたものの一つであるが、様々な科学素材の発明や生活様式の変化から、現代人の生活を離れて行く現状にある。しかし耐久性など他の素材には及びもつかない特質があり、リサイクル可能な自然素材として見つめ直されて活用されるべき潜在力を秘めている。既存の有様を越えた、時代に即した生活資材として万成石を見つめ直し、文化素材としての「石」の価値を再発見しようという試みである。

芸家、建築家など他分野の専門家の協力を得、多角的な視点から石の活用法を追求している。

文化活動の成果

展覧会においては、新しい活用法の提示に様々な反応が現れたが、その中で万成石が持つ未知の可能性が浮上してきた。石が物質の成分として持つ癒しの効用である。現在科学的データの検出中であるが、医学的に実証されれば健康をキーワードに直接生活に係わる方向性が現れる。このように多角的な視点で存在を捉え直そうとすると、生み出される新しい展開がもしろい。

近隣地域の人々に対する周知活動は自分の居住地の近くにこんな所があるという認知から、万成石に対する興味と呼び覚まされつつあると感じられた。特に子供たちにおいては顕著であり、身の回りの石の使われ方に目を向けてもらうきっかけになった。まだ一時的なものであるにせよ、継続することにより岡山の特産としての認識の深まることを期待される。

今後の課題と問題点

1. 製作に関すること

石は加工に手間が掛かり、全て単品の手作りの為大量生産が不可能である。結果どうしてもコスト高になるが、その反面どの素材も及びのつかない耐久性を持っている。使いようによっては数百年単位で活用でき、近年見直されているエコロジーの思想にそっていると考えられる。重さを逆手に取った利用法や、水や薬物に侵されにくい特質を活かした製品の開発には多様な可能性が感じられる。加工技術までも中国に依存している日本の現状では今後の国内生産に不安を感じざるを得ないが、技術の保持のためにも顔の見える範囲での製作を心がけたい。

2. 周知活動に関すること

石に親しみの薄い若年層は、岡山人であろうとも万成石の名を知らない人は多いと思われる。新たな需要を産むために若い人たちに身をもって石を体験して頂ける機会を持ちたい。石は簡単に扱える素材ではないため、上手に彫るには熟練が必要だが、気軽に手にできる方法を探り出し、町中でのイベントなどにも出向いていきたい。また、岡山の文化財として世界に発信できるクオリティーのデザインを生み出し、地域力の一助としたい。

●執筆者：よしもと正人

石を生活の中に活用

岡山市内のアトリエでよしもと正人氏の石展

この展覧会は、岡山の県産石を使った生活用品の研究開発を目的として、万成石の魅力を引き出す。よしもと正人は、岡山県産の万成石をテーマにした。万成石は、桜色のカリ長石を含む美しい花崗岩として、古くから様々な石造物や建築物に活用されてきた。特に関東では名高い。明治神宮絵画館・新宿伊勢丹ビル・銀座千疋屋などの外壁に使われ、近隣では岡山県立美術館の内装材として美しい石姿を披露している。吉田茂氏や石原裕次郎氏のほか有名人の墓石にも多く用いられ、また彫刻家朝倉文夫氏はブロンズ像との相性の良さから全ての彫刻作品の台座に万成石を選び、彼の門下もそれに習っている。イサム・ノグチが牟礼町にアトリエを構える前の10年間を万成山で制作していたことは有名な話だが、彼の代表作のひとつ「パリ・ユネスコ庭園」は万成石ならではの造形を見せている。古くは城の普請に護岸工事、家の礎石から壁の石積み、石臼や灯籠に活用され、池田家代々の墓はもちろん万成石である。そんな地元特産の石も安価な外国産石材の大量輸入により、資材としての存在価値が低下してきている。石はその加工技術を含め、古来より日本人の生活文化を支えてきたものの一つであるが、様々な科学素材の発明や生活様式の変化から、現代人の生活を離れて行く現状にある。しかし耐久性など他の素材には及びもつかない特質があり、リサイクル可能な自然素材として見つめ直されて活用されるべき潜在力を秘めている。既存の有様を越えた、時代に即した生活資材として万成石を見つめ直し、文化素材としての「石」の価値を再発見しようという試みである。




平成16年10月5日 日本石材工業新聞より